

つ深く自づと私の心を領するに違ひない。

大晦日の空想はかうして果敢なく空想に終った。けれどもなほ、空想は空想として時折私の念頭に浮かばう。万一幾年後か幾十年後か、ふとして空想通りの大年の夜が訪れたならば、さうだ、私は一間に只独りゐて、静かに一碗の茶を啜らう。その時こそ、亡き父を懐かしみ、偲び、悲しむ、滂沱たる涙が、快く私の眼がしらから溢れ落ちやう。

(大正13年10月31日 曲水10―1)

〔小品〕

電車の中で

多分一昨年の秋の頃と思ふ。上野の広小路で茶道具と不図目についた最初の鳴雪句集とを買った帰途、宇田川町で青山行の電車に乗換へたのは午後六時頃であった。何の気もなく見渡した車内の人々の顔が、どういふものか皆まづい顔ばかりだったので、こんな場合突然起る激しい感覺性から、私は急に不快を覚えて、読さしの鳴雪句集をまた取出して、なりたけ他が見え

ないやうに顔を圧しつけて読みだした。御成門で大分客が乗ったらしかった。ふと私は鋭い声で「や」とか何とか云て前に腰を下した人があったのに、句集から眼を放した。此の瞬間私の頭には、百穂画伯の筆でなじみの鳴雪翁の面影が閃めいた。今私の前に腰かけられた老体の方の特徴あるつぶらな眼、痩せた頬、白い顎髯、尖った眉——私はまだお目に掛った事はなかったが、どうしても鳴雪翁に違ひない。さう思ふと私は急に先生の前で先生の句集を読むのが何だか面はゆくなくてそつと懐中にしてしまった。さうして何ともしれぬ嬉しい気分になって、失礼ではあったがヂツと先生から眼を放さなかつた。この時先生は山高帽を冠られて黒のインパネスを着られて、袴を着けた膝の上には真白な風呂敷に包んだ大きな菓子折やうなものを載せられてゐた。そして風邪を召されて居られたのか頸に白い絹ハンケチを巻かれてゐたので、思ひなしかステッキの握りの曲りを両手で掴んで其の上に顎を置かれてや、うつむき勝の御様子は何となく懶げに見えた。電車の中の人は矢張り皆まづい顔ばかり並べてゐた。その中であつて一人先生の永い間の俳句生活を経られた飄逸晒脱の面ざしは何とも云へず尊く眺められた。かくて私は懐中にある鳴雪句集と此の奇縁を大変面白く思ひながら勿論先生も無言、私も無言のうち三河台町で電車を下りた。

其後先生には度々お目に掛つてゐる、まだ此の夜の事を伺つた事はないが、たしかに先生であつたに違ひない。因みに此の夜深く私に奇縁と思はしめた句集は、さんざん私が読んで、今